

箱根駅伝余滴

吉田 真人

すっかり新春を代表するイベントの一つとなった箱根駅伝。

今回の第100回大会を中継した日本テレビの世帯視聴率は、28%余（関東地区・ビデオリサーチ調べ）。能登地震等の影響か、ここ数年より2%ほど低いのが、高い視聴率であることに変わりは無い。昔は、サッポロビール1社がスポンサーであったが、認知度が上がるに連れ他スポンサーの人气が上がり、今や駅伝の合間にコマーシャルを入れるのではなく、コマーシャルの合間に駅伝を入れるという状態となっている。1番組には1業種1社という常識も崩され、同じ業種から数社が提供している。尤も、ビールだけはサッポロ1社提供が守られている。

新聞の記事ボリュームも今昔の感がある。昔は、共催の読売新聞以外はベタ記事であったが、今や日経新聞でさえ、連日ほぼ1ページ全面を使って結果をレポートしている。

今年は7名の所謂留学生ランナーが走った。区間賞をとるとテレビがインタビューをするのが、今年は高レベルのランナーがいなかった。“日本語が全く出来ない留学生”という事実が明らかにならずにはすんだのはご愛嬌。

彼らの招待・滞在費用等は誰が負担しているのか。彼らに限らず全チームが寄宿舎生活であり、これら全ての費用は各大学の費用として私立大学補助金を計算するベースとしてカウントされている。同補助金総額は2977億円（令和5年度）だ。金持ちニッポン！ゆるゆるニッポン！

3年ほど前、新聞チラシに箱根駅伝クイズが載っていた。正解者には抽選で駅伝公式グッズ各種が当たる、というので応募した。

数週間後玄関前に来客、クイズの賞品を持参したという。ドアを開けると若い男が賞品の手袋を差し出す。但し彼の訪問目的は別で、新聞の勧誘であった。読売新聞を3ヶ月契約すればパーカーを渡す、と言う。何もなしではドアを開けてくれないので、吊りエサを持ってきたという新手の勧誘だ。散々押し問答の末、やっと退散させる事に成功。とんだ駅伝余滴であった。

（2024年1月11日）